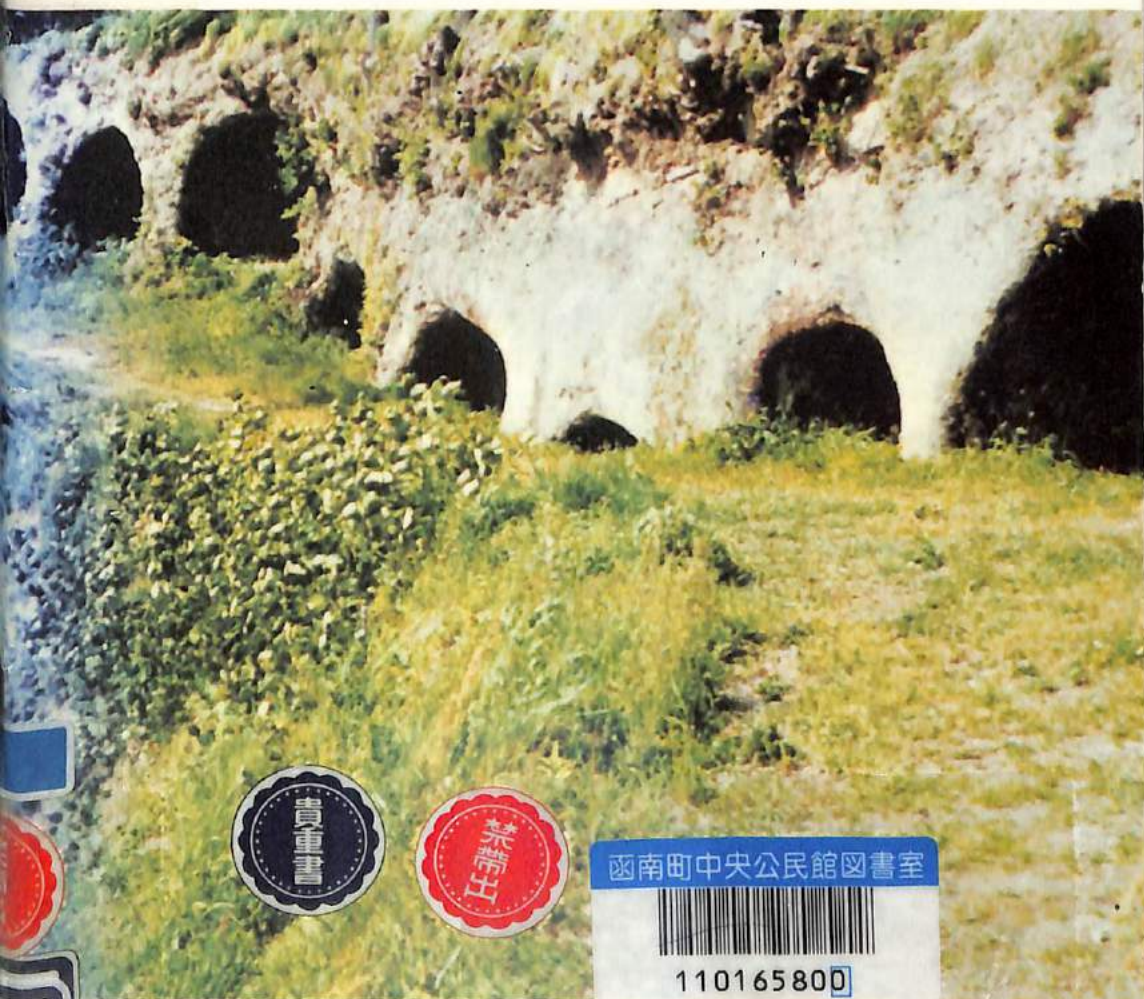


三

函南町の文化財



函南町中央公民館図書室



110165800

函南町教育委員会

目次

発刊にあたって	町長 中村博夫	(1)
編集によせて	教育長 鈴木孝司	(1)
町章・町の花・町の木		(2)
函南町の位置及び地勢・歴史		(3)
文化財案内		(4)
1. 柏谷横穴群	(6)	
2. 丹那断層	(9)	
3. 旧東海道の石畳	(10)	
4. 旧東海道の一里塚	(11)	
5. 佐崎出丸址	(12)	
6. 長源寺薬師如来座像	(13)	
7. 天地神社の大樟	(14)	
8. 春日神社の大樟	(15)	
9. 火雷神社の断層	(16)	
10. 八重窪横穴群	(17)	
11. 柏谷の横穴群	(17)	
12. 女坂横穴群	(18)	
13. 仁田忠常の墓	(19)	
14. 北条宗時の墓	(20)	
15. 万巻上人の墓	(21)	
16. 高源寺の境内	(21)	
17. 函南町の自然景観	(22)	
18. 六万部寺の経塚	(24)	
19. 田代城址	(25)	
20. 藤明古墳の石棺	(25)	
21. 法伝寺の仏画	(26)	
22. 興聖寺の模絵	(27)	
23. 養徳寺の仏画	(27)	
24. 双体道祖神・日金山の道しるべ	(28)	
25. 磨崖仏	(29)	
26. 駒形堂	(30)	
27. 泉竜寺の毘沙門堂	(31)	
28. ハツ溝用水堰・ハツ溝用水争論	(32)	
29. 酪農頌徳碑	(33)	
30. 禁伐林のブナの大木	(35)	
31. 禁伐林のアカガシの大木	(36)	
32. 天池	(36)	
33. こだま石	(37)	
34. 空波の句碑	(37)	
35. 不動の滝・観音滝	(38)	
36. 大場の久八の墓	(39)	
37. 比企尼の墓	(39)	
38. 古民具収蔵庫	(40)	
39. 民家	(42)	
40. 古文書	(43)	
41. 田方の杜	(43)	
42. 十国峠	(44)	
43. 源実朝の歌碑	(44)	
編集後記	(45)	
八島手神社の石仏(丹那)	(裏表紙)	

発刊にあたって

函南町長 中 村 博 夫

函南町は美しい自然に恵まれ、史蹟に富む豊かな美しい町です。

特に箱根峠に連るブナ・アカガシ・ヒメシヤラを中心にした自然林は「禁伐林」として、昔から大事に保護され、水源涵養地及び保健保安林として、私たちの生活に潤いを与えてきてくれました。

私は少年時代からその美しい禁伐林に魅せられ、以後その保存と愛護を、謂わばその自然保護を強く訴え実践してまいりました。どこの区内にも、昔ながらの樹々がそびえ、その樹々の間に、お寺やお宮の屋根が夕映えに輝くさまは、昔も今も美しい景観であります。

そうした美しい景観・自然は、昔から保存されてきた多数の文化財とともに、わが町の共通の文化遺産であり、誇りであります。

このたび、文化財保護審議委員会の皆さまのご尽力によって、「町の文化財」が発刊されますことは、まことに時宜を得た有意義なことであり、直接執筆・編集・割付にあたられた編集委員の皆さまに心から敬意を表します

最後に、わが町にあるかけがえのない多くの緑と文化財を、町民こぞって保存されるよう切望します。

編集によせて

教育長 鈴 木 孝 司

昨年度、文化財審議委員会の皆様のご努力によって、小冊子の体裁に編集された「函南町の文化財」が、ここに更に稿を改めてカラー版として発刊されることになりました。分り易い説明と読者に親しみ易いようにとの方針を堅持し、前回の小冊子編集過程の中で出された、いろいろの問題点に検討を加え、改むべきところは改めて再刊に踏み切った良心的態度に深甚の敬意を表するものであります。

函南町にはたくさん文化財があります。国の指定を受けているもの、県の指定を受けているものを含めて、ここに掲載されているものの他にも、まだ取り上げるべきものもあるでしょうし、更に内容的に研究を深める必要のあるものもあると思います。文化財と一口に言いますが、実にその分野は多岐にわたっており、自然・産業・信仰・芸術等は中すに及ばず、天災による爪跡とか、当時の人々の生活に密着したもので、すべて函南の歴史を物語っているものばかりであります。

私達は、こうした文化財を通して、古代からこの地に生活していた人々の心に触れ、その生活に思いをいたすことができるのであり、それがとりもなおさず「ふるさと函南」を愛することにつながると考えます。

この小冊子を愛読していただくとともに、今後とも文化財に親しみ、これを大切に愛護保存していただきますようお願いいたします



町章

丸は平和を示し、垂直、垂平線は厳しさを物語るもので、いつも活動は厳しさをともなう。これを和でつないで一字の中に明るい町を表現している。

昭和44年6月18日制定。町のカラーは紺。



▲町の花・ハコネザクラ

ヒメシャラ

夏に、ツバキに似た白い花が咲く。ツバキ科の落葉喬木である。樹皮がなめらかなので、サルスベリとまちがえられることもあり、サルタ、サルナメリとも呼ばれる。幹は赤黄色で枝が細く赤褐色をおびて多数の小枝にわかれている。箱根原生林の代表的な樹木。

町制施行10周年を記念して昭和48年4月1日制定。

位 置	東経	138度56分53秒
(役場)	北緯	35度 5分13秒
広 さ	東西	約12.7km
	南北	約11.1km
	最高地	1,004 m
面 積		66.24km ²

ハコネザクラ

ハコネザクラは、富士から箱根にかけての山地に多く自生しているマメザクラの別名である。

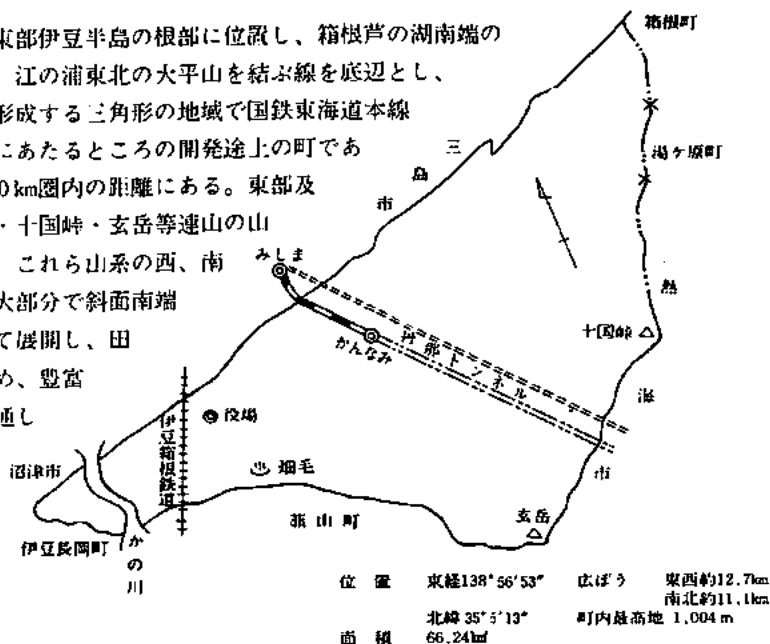
4月頃小さい花が咲き、非常にかれんで、郷土に適しており、育成も容易であるので、町制施行10周年を記念して昭和48年4月1日制定。



▲町の木・ヒメシャラ

函南町の位置及び地勢

函南町は静岡県東部伊豆半島の根部に位置し、箱根芦の湖南端の箱根峠と、駿河湾、江の浦東北の大平山を結ぶ線を底辺とし、玄岳を頂点として形成する三角形の地域で国鉄東海道本線丹那トンネル西口にあたるころの開発途上の町であって、東京から100km圏内の距離にある。東部及び北部は、箱根峠・十国峠・玄岳等連山の山嶺をもって境され、これら山系の西、南斜面が本町地積の大部分で斜面南端部は平地地帯として展開し、田方平野の一角を占め、豊富な資源と、四季を通した温暖な気候に恵まれ風光明媚な住みよい町である。



その歴史

函南町は、徳川時代、町内の各区(字)が、それぞれの村として菰山の代官江川氏、沼津藩主水野氏、小田原藩主大久保氏等の支配に分轄されていた。しかし、幕末に菰山代官所の所轄となり、明治元年、廃藩置縣の発布と共に、菰山県、更に明治4年、菰山県が廃されるや足柄県の所管となり、明治5年に、仁田・大土肥・柏谷・平井・丹那・畑・軽井沢・田代・桑原・大竹・上沢・間宮・塚本・肥田の14ヶ村をもって、足柄県に編入された。

その後明治9年4月、足柄県が廃止されるや、静岡県に移り、5月、第8大区7小区と改められた。

明治22年、町村制が施行されるに及んで、駿東郡日守村を一区に、君沢郡山中新田小学「馬坂」を桑原区に合併させ、また仁田村外15ヶ村の位置が、函嶺(箱根)の南に当たるので、総称を「函南」とし、仁田村外15村合併して「函南村」を誕生させた。

その後、明治41年11月、肥田地区内の小学「新田」を分割して一区を形成させ、地区を新田区と称し、17大字が形成された。

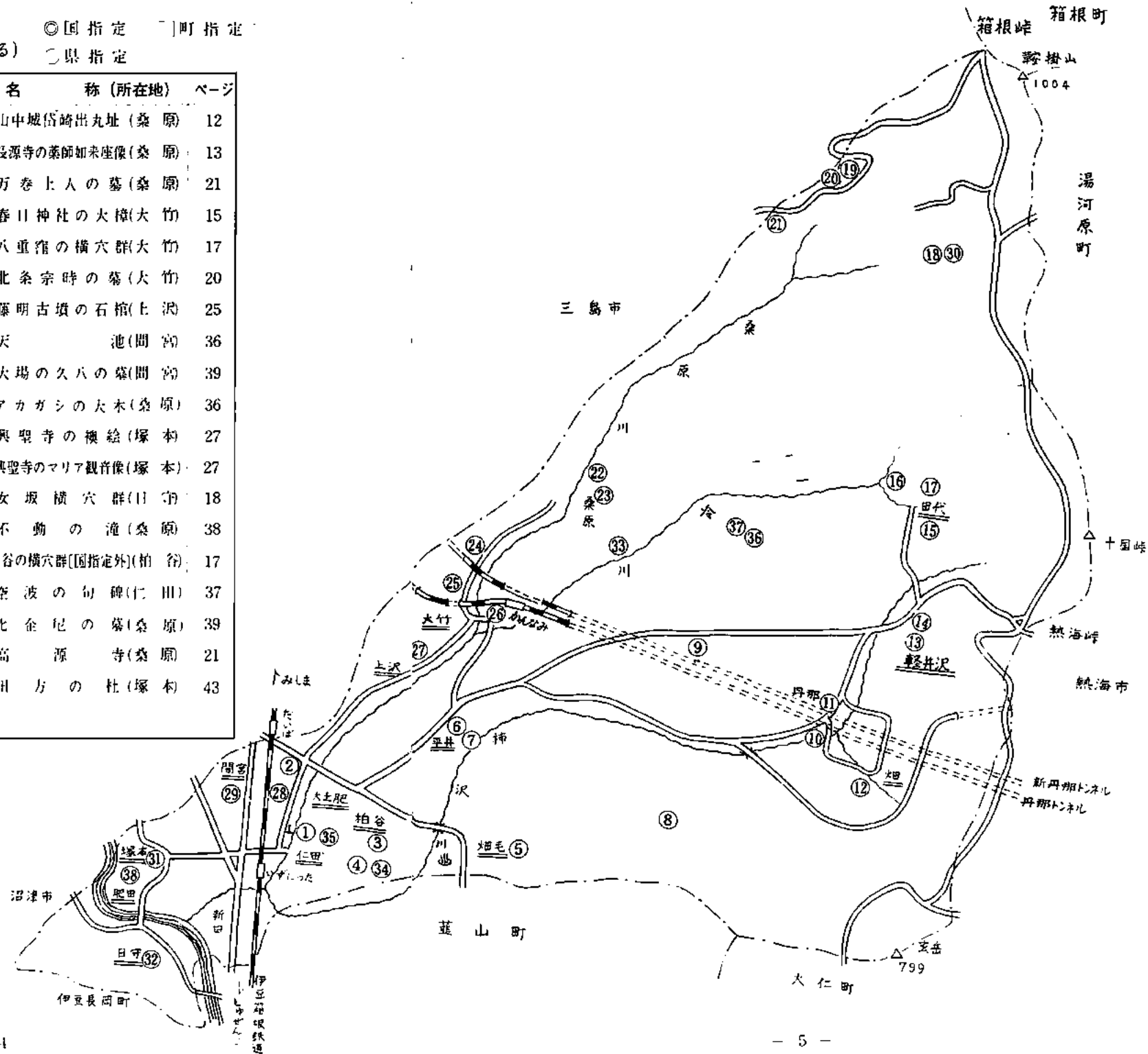
昭和38年(1963年)4月1日町制施行され、各字も各区として発足、現在次の36区がある

仁田・大土肥・柏谷・畑毛・平井・丹那・畑・軽井沢・田代・桑原・大竹・上沢・間宮・塚本・肥田・日守・新田・八ツ溝・鉄道官舎・新幹線・通信病院・函南・冷川・袋の沢・細沢・六本松・奴田場・城山・柿沢谷・白道坂・中冷川・冷川町地・宝蔵台・ハサデナ・ダイアランド・鶴巻

文化財案内

(町案内板による) 〇国指定 □町指定 △県指定

No.	名 称 (所在地)	ページ	No.	名 称 (所在地)	ページ
1	仁田忠常の墓(仁田)	19	21	山中城岱崎出丸址(桑原)	12
2	ハツ溝用水堰(ハツ溝)	32	22	長源寺の薬師如来座像(桑原)	13
③	柏谷横穴群(柏谷)	6	23	万卷上人の墓(桑原)	21
4	六万部寺の経塚(柏谷)	24	24	春日神社の大樟(大竹)	15
5	磨 康 仏(畑毛)	29	25	八重窪の横穴群(大竹)	17
⑥	天地神社の大樟(平井)	14	26	北条宗時の墓(大竹)	20
7	養徳寺の仏画(平井)	27	27	藤明古墳の石棺(上沢)	25
8	こだま石(平井)	37	28	天 池(間宮)	36
9	法伝寺の仏画(蟹の沢)	26	29	大場の久八の墓(間宮)	39
10	酪農頌徳碑(丹那)	33	30	アカガシの大木(桑原)	36
11	古民具取蔵庫(丹那)	40	31	興聖寺の襖絵(塚本)	27
⑫	丹那断層(丹那)	9	31	興聖寺のマリア観音像(塚本)	27
13	泉竜寺毘沙門堂(軽井沢)	31	32	女坂横穴群(日守)	18
14	駒 形 堂(軽井沢)	30	33	不動の滝(桑原)	38
15	双体道祖神(田代)	28	34	柏谷の横穴群[国指定外](柏谷)	17
16	火雷神社の断層(田代)	16	35	空波の句碑(仁田)	37
17	田代城址(田代)	25	36	比企尼の墓(桑原)	39
18	禁 伐 林(桑原)	34	37	高 源 寺(桑原)	21
⑬	一 里 塚(桑原)	11	38	田 方 の 杜(塚本)	43
20	旧東海道の石甕(桑原)	10			



1. 柏谷横穴群 (柏谷) 国指定

(史跡)



▲柏谷横穴群 (柏谷)

1. 位置

函南町柏谷にある。伊豆箱根鉄道大場駅の東方、約2.5kmの丘陵地帯。箱根山から西方に伸びるなだらかな丘陵の最南端にあたり、遺跡の東側を丹那盆地から流下してきた柿沢川が流れ、その川の対岸には畑毛温泉がある。

2. 時代

ほぼ7世紀から8世紀ごろの遺跡である。

3. 横穴群の特徴と周辺の環境

横穴のある丘陵地帯は、質の悪い凝灰岩から成っているが、周辺の丘陵はいずれも厚く、関東ローム層が堆積している。この凝灰岩は、箱根山の西麓の一部から狩野川流域に出来た田方平野の東端に隆起した高さ20mから30mまでの丘陵地帯に、その凝灰岩質の傾斜面を利用して作られた横穴墳墓である。

これらの横穴墳墓は、おおむね、南・東・西の三方面のいずれかに面して掘られたものが多いが、自然の地形と凝灰岩の崖面の都合では、ほぼ北面して掘られたものもある。その地域は東西に約400m、南北に約250mにわたって存在し、これらの丘陵に続いて南側前方に標高66mの「城山」と称する円墳のような形をした大きな山があり（現在は宅地開発のため消滅）その西南方には近年まで「稲妻ヶ池」と称した沼沢の湿地帯になっており、今は、弁天島と称する小さな池を巡らした森があって小祠を建て昔の面影をとどめている。

狩野川はこの遺跡の前面で南流してくる柿沢川や中小の河川を併せ、大きく向きを西へ変えて沼津方面へ流れて行った場所で、遊水池の要素の強い湿地であった。それ故この田方平野の周辺地域には、山本遺跡をはじめ、数々の弥生式時代の農耕遺跡が存在している。



4. 横穴群の構造

▲横 穴

横穴の開口されている地域は東西約500m、南北約300mの範囲で、この範囲内の節状に伸びる各丘陵斜面に群をなして存在している。その正確な数は不明だが、およそ250基が開口しており、未開口までいれると300基以上はあると推定されている。

昭和22年、軽部慈恩博士が発掘調査された際、この地域をA・B・C・D・Eの五地区に分けられた。

また横穴の槨室の構造において五種類の型に分類された。

5. 出土品

各横穴群から出土した各副葬品は当地方の後期古墳からの出土品と同様であり、概して数は少ないが死者に対して人々が当時の一般的風習に従って埋葬したことがわかる。

主な出土品として次のものがある。

鉄類・刀類（直刀・刀子）
玉類（曲玉・切子玉・なつめ玉・
耳環・小玉・平玉）

土師器
須恵器（杯が多い・長頸壺・横瓶
・平瓶・小型壺・鉢）

亀甲片（腹甲）
人骨（細かい骨片となって出土）



▲出土品（亀甲片）



6. 歴史的意義

第三次調査までにおいて次のことが指摘されている。

「横穴の営まれていた時期は約7世紀から8世紀と推定され、占部関係の人々の墓所としても利用されていたことが推定される。当時の伊豆国は、天武9年に駿河国から分離した下国である。7世紀に入って、新しい技術集団が伊豆国に入ってきた(伊豆長岡町の瓦窯跡・家形石棺の出現)ことから、新技術をもった新興国として相当発展したことが考えられる。また周辺の横穴の多さから考えると横穴の発生そのものにも外的要因があるように思われる。一般の人々とは違った新技術、または特殊な技術をもった人達の存在が考えられる。時間的にも相当長期にわたって、この地域が墓所として利用されていたと思われる。

▲出土品（馬具・刀子等の鉄製品）



▲出土品

全国的に、これほどの横穴が集中している遺跡もあまりないことから、本遺跡は、今後の古代史究明のための重要な遺跡として、その保存の処置を構ぜられなければならない。」

（第三次調査報告書より）



▲出土品

2. 丹那断層(畑) 国指定

(天然記念物)



北伊豆地震

昭和5年(1930年)11月26日、午前4時2分46秒伊豆半島北部に大地震が発生(北伊豆地震)、この際、丹那盆地を中心に、ほぼ南北に、延長15キロの断層があらわれた。

北は箱根に通じ、南は浮橋に連なり、断層線の西側は東に比べ、地盤沈下、東側は隆起、更に東側は北方に、西側は南方に水平移動している。

丹那盆地では、名賀の西から川口の森の西側を通過し、畑、乙越の中間から玄岳山麓に出て南にのびている。

殊に名賀から川口の森に至る所では、田の陥没70cm、里道の水平移動70cmが記録され、旧、子の神社前では道路の食い違い55cm、落差25cmが記されている。

また丹那の西方には「西方断層」、東方には「滝沢断層」、下丹那には「下丹那断層」、丹那トンネル内にもそれぞれ断層が表われている。

これら断層の中でも、殊に丹那、畑上、乙越、253番地の田70坪に生じた断層が、学術上きわめて貴重な資料となっている。昭和7年2月、県知事指定による天然記念物として保存され、昭和10年6月7日、国指定となり、現在に至っている。

なお掲示板には次のような説明がある。

「昭和5年11月26日に起こりたる北伊豆地震に際して地上に現われたる丹那主断層の最も顕著な部分なり。断層は殆ど南北に近き方向を取り、東側の地塊は西側に対して南に移動したるを示せり。かつ水平移動距離は指定の場所において約2.6mに達し、かつ西側が東側に対して少しばかり高まりたるを見る。」

- 注意 1. みだりに柵内へ立ち入らざること
1. 指定地域内の現状変更をなさざること

昭和10年9月8日 建立



▲丹那断層(畑)

3. 旧東海道の石畳(桑原) 国指定

(史跡)



▲旧東海道の石畳(桑原)

天明7年(1787年)以前に造られていたことが、江川文書で明らかにされているが、文久元年(1861年)孝明天皇の妹、和宮内親王が14代将軍、徳川家茂に降嫁された際、幕府が、時の代官江川太郎左衛門英敏に命じて、東海道を改修させた。その時、特に箱根街道は意を用いて、石をもって敷きつめさせたのだといわれている。また一説には、この敷石工事は、幕末風雲急を告げるに及んでの江戸方の軍用道路の築造ではなかったかといわれている

この旧東海道における「箱根旧道」とは、主として江戸時代の情緒豊かな東海道五十三次の道中、天下の難関として名を馳せた、松並木・石畳の街道を指している。この「箱根旧道」の名物として知られているのが石畳である。

東 海 道

東海道が開通したのは崇神天皇10年、四道将軍の派遣の時といわれている。

太平洋に面した一帯の地方で、伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・甲斐・伊豆・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸の15ヶ国から成る海道諸国を貫通した道路、それが「東海道」といわれている。

802年(延暦21年)富士山が噴火して足柄路が閉ざされると、新たに箱根の山路が開かれた。

東海道の宿次を五十三次と定めたのは、慶長6年(1601年)徳川家康の時で次の宿場が決められた。

品川・川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚・藤沢・平塚・大磯・小田原・箱根・三島・沼津・原・吉原・蒲原・由井・興津・江尻・府中・鞠子・岡部・藤枝・島田・金谷・日坂・掛川・袋井・見付・浜松・舞坂・新居白須賀・二川・吉田・(以下略……)

この「東海道」を扱った文学作品に「伊勢物語」の「東下り」・「平家物語」の「海道下り」・十返舎一九作「東海道中膝栗毛」等が、絵の方では、北斎、広重の「東海道五十三次」がある。

4. 旧東海道の一里塚(桑原) 国指定 (史跡)



▲旧東海道の一里塚(桑原)

江戸の日本橋を起点として街道の1里(約4km)ごとに土を盛り、その上に榎を植えて里程のしるしとした塚である。

慶長9年(1604年)2月、幕府の命を受けて、大久保長安が東海・東山・北陸の三道に、1里(36町)ごとに、通路の両側に高さ3尺、5間四方の封土をもって築かせ、その上に榎を植えさせたので、これを一里塚、または榎塚ともいって、諸侯の参勤交代や旅人の道程のたよりとしたものである。

現在残っているのは、箱根峠にさしかかる「塚原」の手前の松並木の間に一対、笹原に一対、峠を登って接待茶屋北側に1基ある。接待茶屋側の一里塚は江戸から起算して第26番目のものであるといわれている。

榎を植えるにあたっては次のような説話がある。

「大久保石見守は工事中の塚も大部分が竣工するという夏の或る日、大御所(家康)に向かつて塚の上になんの木を植えるべきやを伺ったところ『その方のええ木を植えよ』という言葉をしる木と聞き誤ったといい、また一説には石見守から塚には松を植えては如何と言上したのに対し『よ(他)の木を植えよ』と聞き誤ったという。」(三島市誌) また駿国雑誌には、「この説うけがたし、榎は其の根深く広がりにて塚崩れず故に此木を植えしならん」と記されている。

5. 岱崎出丸址(桑原) 国指定

(史跡)



▲岱崎出丸址(桑原)

山中城の最前線基地としての岱崎城(出丸)跡である。

山中城は天正17年(1589年)時の小田原城主、北条氏康が豊臣秀吉の来攻に備えるため急いで築城した山城である。箱根山の中腹標高600mの地にあつて、南西北の三方が断崖と堀に囲まれた自然の要害で東西約400m、南北約800mの堅城であつたから、小田原方にとっては西方防備の出城としてきわめて重要視されていた。

天正18年(1590年)3月29日、大軍を率いた豊臣軍に攻囲され、北条方は城将、松田康長等、2千余人が戦死し、ついに落城。この城は北条山の地域に本丸、二の丸、三の丸を置き、岱崎に出丸を設け、塁壕も設けられていた。

山中城の守備は城将松田康長以下将兵4,200、西軍に比べると10分の1に充たぬ寡兵であつた。

二の丸の地にある宗閑寺は出丸の守将、間宮康俊の娘が、亡父の菩提を葬うため建立を念願、志果たさず一族間宮小五郎が建立したもので、寺内には、城将以下、小田原方戦死者の墓及び西軍戦死者一柳直末の墓がある。

岱崎城(出丸)守将、間宮豊前守康俊、士卒120(内銃卒80、槍卒30)山中城城将、松田右兵衛太夫康長、副将、間宮康俊(田方郡函南町間宮出身)

秀吉は全軍を三方面に分け次の如く三軍団を編成したのである。

1. 蕨山城攻撃軍(兵力44,000)
2. 山中城攻撃軍(兵力19,500)
3. 小田原城攻撃軍先鋒軍団(兵力25,000)



▲岱崎出丸址の遠景

6. 長源寺薬師如来坐像(桑原) 県指定 (彫刻)

県指定文化財(昭和52年指定)である。平安中期ごろの作といわれ、堂々とした体軀、円満な尊顔、彫りは鋭く、迫力のある姿をしている。高さは110cm、幅は81.3cm、これだけの坐像は近隣にその比を見ない素晴らしい彫刻である。

薬師如来は、今はもう廃寺となりその名残りもとどめない小宮根山新光寺の本尊であったと伝えられる。現在、函南町桑原にある曹洞宗長源寺の境内にあり、地元住民の厚い信仰の中心となって保存されている。もともと桑原の地は箱根権現の神領であり、宗教を媒介として地方文化圏を形成してきた所である。この長源寺には石山を思わせるような巨岩が多く、本堂の向って

右側に古色蒼然たる小高い丘がある。その頂上に向かって西国巡礼を思わせる巡拝の道が廻り廻って続き、道すがら数十にも及ぶ石仏が立っている。その丘に向う坂道の中腹、緑の樹々の木陰に静寂なる草屋の薬師堂があり、そこに薬師如来坐像が安置されている。かたわらに12神将、日光菩薩、月光菩薩の尊像が隨身となって立っている。

新光寺は「箱根山縁起」によれば、弘仁8年(817)この地に建立された七堂伽藍の大きな寺である。金竜寺、一雲寺、徳元寺、雙石寺といった数々の塔頭寺院と多くの僧坊をもっていた。箱根山を開いた万巻上人の霊を安んずるために弟子たちが創建したものといわれている。今日、その名残りを本尊の薬師如来を通じて人々の心に法灯を伝えている。明治の初期の廃仏毀釈にも、生命を賭して守ったこの坐像は先程、200万円余の修理費を投じて修理がなされその尊い温容を人々の前に現わしている。



▲薬師如来坐像(桑原)

7. 天地神社の大樟(平井) 県指定 (天然記念物)

天地神社は大場と丹那盆地の中間に位置し丘陵農村地の中心部にあたる。神社の境内の広場を利用して野菜等の収穫物の集積所でもある。

この大樟は根回りが大きく、かつ樹高がある。枝張りにやや間伸びがあるのと樹皮に艶があるので大きさに対してより若いと思われる。樹高50.0m、胸高周囲13.5m、根廻り21.0m、枝張り、東方10.0m、西方25.0m、南方12.0m、北方11.0m。昭和27年県の天然記念物に指定。

なお、同境内にはオガタマの木が数本あり、いずれも巨木となっている。常緑性で橙色の実が多数つくのできれいだである。

樟の木は日本の暖地一帯に適した種で、ヤブツバキクラス樹林の代表種となっている。大昔はシイ、カシ、クスの巨木が茂っていた。

開発と生活様式の変化によってこれらの樹は不要となり、神社等に残るばかりになった。



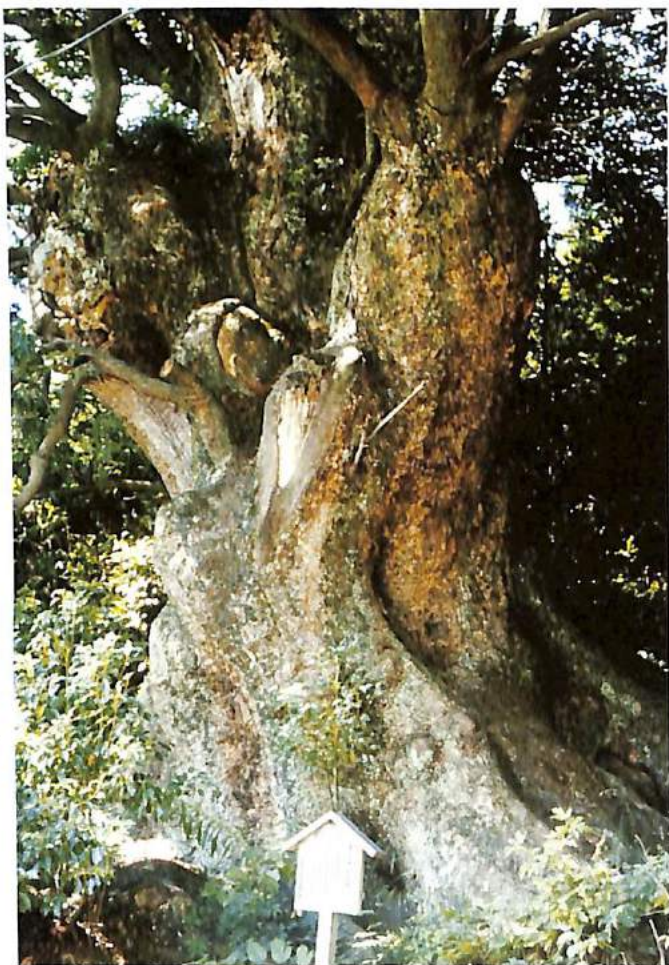
◀ 天地神社の大樟(平井)

8. 春日神社の大樟(大竹) 県指定 (天然記念物)

函南駅から西方へ500m進み、橋を渡って右の道を選び、東海道線と新幹線のガードを越えるとすぐ左手にこの大樟と春日神社がある。この樟は以前樹高が20m以上あったが、火災にあい更に、新幹線ができる時、枝払いされた。また数株あったが北側の巨木が残された。樹勢はきわめて良く、5月の新芽が伸びる頃には最も美しい。主幹の根元には大きな空洞がある。

樹高15.0m、胸高周囲9.1m、根廻り20.2m、昭和29年に県の天然記念物に指定された。

樟の木は広葉常緑樹であり日本の風土に最も適した樹木の一つである。



▲春日神社の大樟(大竹)

9. 火雷神社の断層 (田代) 町指定 (天然記念物)



▲火雷神社の断層 (田代)

北伊豆地震の遺物として、震災時をしのばせる断層である。石鳥居と参道がその激震を今に示している。

●北伊豆地震 昭和5年(1930年)11月26日午前4時2分46秒、北伊豆地方一帯に大激震が襲い、当町においても大地は裂け、家は倒れるなどして多くの死傷者を出した。これより前11月15日より突に1日百回以上の群発的地震があり、人々が恐怖と不安の中で過ごすうち、26日早朝大激震となって襲ってきたのである。この地震による当町の被害は次のようであった。

*罹災戸数(住家の部) 全潰622、半潰490、全焼9、大破280、小破126

*罹災棟数(非住家の部) 全潰500、半潰778、大破432、小破185

*罹災人口……………死亡(男16、女20) 重傷者(男4、女1) 軽傷者(男188、女92) [当時の人口110,328人]

田代盆地入口では直径55cmの木の根を切断し、又低地では地割れが著しかった。田代盆地では道路を横断または遮断して多数の亀裂群を生じ、山道では落差30cm、水平移動26cmの食い違いを生じた。

●被災復興へ 震災の悲報が各地に報道されると県内外から多くの奉仕団が来援し、倒壊家屋の取り片づけ、道路の修築等に献身的な援助を行なった。また多くの負傷者を手当すべく平井には27日より12月10日までの間、日本赤十字社静岡支部救護班の臨時救護所が設置され、また函南小学校には日本赤十字社東京救護班の病院が開設され多くの重軽傷者が救護診療を受けた。

平井においてはキリスト教会の託児所が直後開設され、保母として原藤英子・鈴木百々子の二氏が派遣され、字の婦人会員、女子青年、その他有志の援助のもとに活動、幼な子を預かってくれたために安心して復旧作業に取り組むことができたという。

10. 八重窪横穴群(大竹)町指定

(史跡)

函南町大竹に所在する横穴群である。かつて本地域周辺にも多くの古墳や横穴群が存在していたが開発によりその殆どが消滅してしまい、現存する貴重な遺跡である。

この横穴群は調査された事がなく又出土遺物も不明であるため、造営・使用された年代は不詳である。

現在未開口のものを含め二段にわたり32基の横穴を確認しているが、地形からみて未発見の横穴がまだ存在する可能性が強い。なおこの横穴群は昭和56年7月に町の史跡指定を受けている。



▲八重窪横穴群(大竹)

11. 柏谷の横穴群(柏谷) 国指定を除く

(史跡)



▲柏谷横穴群

柏谷横穴群の分布は東西約500m 南北約200m という広大な地域に造られた事が判明している。しかもその数は300基をくだらないと考えられる程大規模な遺跡である。国の史跡指定を受けていない前清水・沖清水地区では、民家の敷地内であつたり雑草等に隠れ、その数は不明である。しかし前清水地区の南斜面には谷を巡って密集して横穴が見られ、おそらくこの地区だけでも50基近くの横穴が残っていると考えられる。さらにこの他にも多数の横穴が指定される事なく残っている。これらの指定を受けていない横穴も、その価値においては指定地域内にある横穴に何ら劣るものではなく、古代史解明の重要な遺跡である。

12.女坂横穴群（日守） 町指定 （史跡）



▲女坂横穴群（日守）

両南町日守字入山に所在する横穴群である。日守にはこの横穴群のほかに、下ノ谷戸・中里横穴群をはじめ分布状態が把握されていない大小多数の横穴群の存在が指摘されている。また隣接する伊豆長岡町の大北横穴群等をはじめ本地域は横穴墓群の群在する地域として知られている。

この横穴群は調査された事が無いため詳細は不詳であるが、5～6段にわたり未開口のものを含め現在28基を確認している。形態的にも多様性が認められ、未開口のもので閉塞石が良好な状態に残っていると思われるものも認められる。出土品は須恵器の提瓶・甕・高杯等の破片である。

現在確認されている横穴は28基であるが、調査が進展した場合その総数は40基をくだらない規模の存在が考えられる。横穴群が存在する地域でもあり又28基の大部分が未開口である事から歴史的・学術的に非常に価値の高い遺跡である。昭和56年7月にこの横穴群は町の史跡指定を受けている。

13. 仁田忠常の墓 (仁田)

(史跡)

仁田四郎忠常の名は、「富士の巻狩で猪にまたがり、これを退治した」ということであまりにも有名である。

●仁田四郎忠常

伊豆の豪族、仁田忠行の3子として仁安2年(1167)4月10日仁田に生まれ、兄に忠俊・忠次、弟に忠正・忠時があり、5人兄弟のまん中として育ち仁田四郎と称した。

治承4年(1180年)8月17日、源頼朝が叡山で兵を挙げるや忠常はこれに参加、平兼隆、提信遠を攻めた。忠常14歳、初陣の戦功であった。

次いで8月23日、石橋山合戦では3千余兵という大庭景親、伊東祐親との大軍と対戦、奮戦するも功なく敗れ、同27日仁田の館へ帰館。この戦いで兄忠俊は真鶴で、甲斐国住人平井義直と組み打って戦死した。

石橋山敗走から頼朝が再び房州で勢力を盛り返した時、忠常は負傷の完全に癒えぬ身であったが、兵を集め頼朝のもとへ参じた。その途中、藍沢街道で、大庭景親の軍と対し景親を降伏させ、頼朝の所へ引き出すという手柄を挙げた。10月には頼朝に従い富士川に出陣した。



▲仁田忠常の墓(中央) 右 忠時 左 忠正

忠常は元暦元年正月、勢多で木曾義仲の軍と戦い、さらに2月には一の谷合戦に加わり、生田大手門を攻めて平家を追い、9月には範頼に従って京を出発、西海に平氏を追った。翌文治元年正月には範頼に従い九州に入り2月1日太宰少貳と芦屋浦にて戦い、7月には九州一円を平定。頼朝から恩賞として新領地を賜った。その後一時、仁田へ戻り身を置いたが鎌倉に戻った後、文治3年正月、病に倒れ重忠の身となった。この時、妻の菊子は水垢離をする一方、三島大社へ祈願、その祈願の帰途、宮川の江尻の渡し場で舟が転覆し溺死した。文治5年(1189年)妻の祈願の効あって回復した忠常は4月、鎌倉へ邸を構えて移り10月には頼朝に従って奥羽に戦った。

建久4年3月、富士野の狩に曾我祐成を誅した。建仁3年6月、駿河の狩場において富士の山麓の人穴を探検した。

建久5年(1194年)5月28日、富士の大巻狩に参加、荒猪を退治、勇名を馳せたのであった。

建久6年(1195年)2月14日、頼朝に従って再度上洛、6月に帰った。8年には仁田の庄へ帰り風月を友としたが、9年、頼朝重体と聞き鎌倉へ赴いた。正治元年(1199年)正月、頼朝が亡くなるや、鎌倉は北条派・比企派・將軍派の三派に分かれ抗争が始った。この動きの中で、忠常、忠正、忠時の三兄弟は北条氏の謀略にかかり、建仁3年(1203年)9月6日夜、忠常は加藤景廉に忠正は波多野忠綱にそれぞれ討たれ、忠時は台盤所に火を放って自殺をし、ついに仁田氏は北条氏の下にあえない最後をとげた。忠常37歳の若さであった。

14. 北条宗時の墓 (大竹)

(史跡)



▲北条宗時の墓(大竹)

北条宗時の墓は、東海道線函南駅で西へ約500m下る大竹神戸坂、右側台上の森に宗時神社として祭られている。土地の人々から「時まつあん」と呼び親しまれている。五輪の小塔、大小2基があり、大が北条宗時、小が狩野茂光の墓と言われ、傍らに両墓の謂れを記した大きな碑がある。

石橋山の合戦に敗れ後退の途次この地で戦死、後年父時政によりこの台上に祭られたと言われる。

石橋山の合戦は一部記録によると、頼朝より「憎き北条を討て」との命を受け、伊東祐親、大場景親、平井紀六久重軍等が、北条勢を一気に攻略、北条勢はひとたまりもなく崩壊、出陣地、舟山の高源寺をさして落ち、態勢の立て直しを図ろうとした。しかし追手が激しいため父時政は宗時の弟四郎義時と共に桑原の神原、原の台を経て湯山箱根に落ちのび、甲州に逃れようとした。

宗時勢は追手を防ぐため、冷川道を経て桑原に向かおうとしたが、業渡(神戸)付近で平井紀六久重軍と遭遇激戦となった。宗時軍はよく奮戦したが、平井紀六久重の重ね弓の剛弓に射たれた。矢は宗時の胸板を突き抜けたと言う。この時、平井紀六久重は大声を上げ、「大将時政を討ち取ったり」と叫んだので、北条勢は戦意を失い、矢傷の身となった狩野茂光も自刃し果てた。時政の戦死を堅く信じた人々は今もなお「宗時神社」を、「宗時神社」といわず「時まつあん」と呼んでいる。

平井紀六久重は徳情の厚い人で、戦い終わって、敵味方の戦死者を手厚く葬り、宗時、茂光の墓塚を並べ特に大きく築き祭ったと言われる。

後年、父北条時政が現地に来て骨を拾い現在地に慰霊墓を作ったと言われる。現在の横渡り下付近には「土まんじゅ塚」が無数に並んでいたが、丹那トンネル工事用の軽便鉄道工事その他の為、今は殆ど潰され、数個が残っているのみである。

「吾妻鏡」には「……また北条殿同四郎主殿は箱根湯坂(桑原小宮根権現のあったと言う付近)を経て甲斐国に赴かんと欲す、同三郎は土肥山より桑原に降り平井郷を経るの処、早河の辺において祐親法師の軍兵に囲まれ、小平井の名主紀六久重がために射取られ終わんぬ。茂光は行歩進退せざるによって自殺す云々」とある。

15. 万巻上人の墓 (桑原)

(史跡)

▶ 新光寺跡



▼ 万巻塚



万巻塚と呼ばれる塚は、桑原川に沿った神賀道にあり、そこに石の祠が祭られている。

757年(天平宝字元年)万巻上人は箱根へ行き、やがて759年、箱根権現を作ったといわれている。

箱根神社には、什宝として木造の「万巻上人座像」一軀があるという。

上人は桑原の地を愛されていたので、弟子達が上人の霊を安んじようと建てたお寺が、新光寺である。

16. 高源寺の境内 (桑原)

(史跡)

宝船山高源寺は函南駅より東へ2.5km、舟山の深山幽谷にある曹洞宗の名刹である。

源頼朝伊豆配流の折の後年、頼朝の乳母比企尼の計らいで文豪上人と源氏再興の作戦計画をした寺とも言われ、石橋山合戦出陣旗揚げ、軍勢ぞろいの地とも伝えられる。

建久元年(1190年)野火のため焼失したため頼朝鎌倉入り後、桑原小宮根権現付近に七堂伽藍の新光寺を建立、この寺をその奥の院として再建宝船山高源寺と寺名を改めた。

元亀2年(1571年)慶長年間(1606年)再度野火のため焼失したが、いずれも原図に基き再建されて今日にいたっている。「子授け・出世寺」としても有名である。



▲ 高源寺の境内

17. 函南町の自然景観



▲ダイアランドから富士山を望む

18. 六万部寺の経塚(柏谷)

(史跡)

柏谷向原土地の六万部寺は日蓮宗だが大昔は真言宗稲妻寺と言う尼寺であった。伝説として次の二説が語り伝えられている。

その一 源頼朝の乳母、比企尼の計らいで頼朝と文覚上人がこの寺で会談、文覚の懇ろな説得により頼朝は源氏旗揚げを決意。以来この寺で文覚より戦術学を、地域の地神の丘で大將軍としての心得を学び、又元弁天の森で厳しい武術で身体をきたえさせられた。

時がたつに従い山木判官に怪しまれ、寺の大搜索を受けることとなったが通報により、文覚はいち早く逃げ、頼朝は戦術証拠書類をことごとく前山に持ち出し粗朶木高く燃やし、搜索隊の来時は泰然として炎の前に立ち、「我は六万部の経を読破、その経文を脳中に収めた証に燃やすものなり。」と言って泰然としていたと言われる。以来六万部の経塚と言う。

その二 頼朝より130数年後、建武の頃(1335)瓢塚ふくひんづかが作られたが、江戸末期に壇徒墓所を広げるため中断、頭部を石囲いしたと言われる。

瓢塚ふくひんづかの由来……護良親王は史上鎌倉で暗殺とされているが、瀨部義弘によりひそかに伊豆・流島、この寺に蟄居していた。天下の僧兵が集り再び不穏が伝えられ京都に追われる途中、黄瀬川で死亡。この寺に運びもどされ、高貴の方ゆえ瓢塚として葬られたと言われる。



▲ 六万部寺の経塚(柏谷)

19. 田代城址(田代)

(史跡)

源頼朝の武将田代冠者信綱が、田代に城を構えたといわれる。その城跡として注目されている。

当時この地は浮橋から箱根に至る街道筋にあっていた。城跡面積は5ヘクタールで一方は河川で水源地をなしている。「増訂豆州志稿」に「田代村、冠者源信綱、狩野ノ田代ニ居り、後此ニ来り住ス、以テ村名トス。伊豆鑑ニ云、田代冠者居住ノ地也。船山、田代、丹那、軽井沢ハ領地ナル可シト。」「伊豆鑑」には「信綱の古城を詳しく尋ねけるに、自邑六七町北に当って山手の平地なる所に惣堀の跡有。是れ則ち冠者殿常の館なり。先年当所の百姓古城の辺にて耕作の時、土深く穿ければ大判一枚掘出したり。前後一枚宛掘出す事三度也云々」



▲田代城址(田代)

20. 藤明古墳の石棺(上沢)

(史跡)



▲藤明古墳の石棺(上沢)

この岩盤の下に石棺から直刀、金環、管玉、曲玉、首飾、あぶみ等多数が出土した。出土品は函南町婦人青少年会館資料室に収蔵されている。出土品の質量から推測して相当豪族の墓であったと思われる。

●竹倉越古墳

函南町上沢字竹倉越丘陵数本の太竹の間にほぼ5mおきに4基の円墳があり、中2基に石の祠が祭られている。(豊竹家所有地内) 昭和の初期、中1基を発掘を始めたが年寄がたたりを恐れ埋め戻したそうだが、地下に加工した石を認めたが解明されずに終わった。藤明古墳と同時代の豪族の墓ではなかろうか。この古墳は平井の御堂山古墳と相対峙している位置にある。

●藤明17号古墳

函南町上沢字藤明にある。
藤明古墳群30余基中16号及び17号の2基発掘。



▲藤明古墳の出土品

21. 法伝寺の仏画(鬘の沢)

(絵画)



▲地獄図

神亀2年(727年)行基により開かれたといわれる法伝寺にある仏画、町内に残された文化財の絵画の中では最も古く、最も価値ある作品である。

大きさは約畳1畳で、杉材の1枚板に描かれている。因果応報の理をとえた地獄、極楽の図である。着色もほとんど剥落しており、額の裏面には筆者の年号もなく不明である。

この寺は、鬘の沢にあり「法田山法伝寺」というが、この地名については由緒がある。「伊豆誌」には頼朝がこの地に泉があり、これを用いて鬘水としたとある。

また伝えられている所では、頼朝が蛭ヶ小島から伊豆山権現に参詣の途上、この地を通られたとき、この法伝寺のかたわらに泉井があるのを見て休息の後、鬘の乱れをかき上げたとある。

もし頼朝の大願成就を祈念して奉納されたものであれば相当の絵師が描いたものであり、800年以上にさかのぼる時代の作品と思われる。



▲極楽図

なおこの地獄、極楽の絵には次のような語り草がある。「生きている間に他人の目をごまかした人は、地獄でえんまさんにひどい目にあう。動物をいじめた人は、牛や馬などのために石臼へ入れられてこずかれる。火事を起した人は火の車にのせられて、血の池へ逆さに投げこまれる。針を粗末にした人は針の山をころがされる。前世に人を泣かせたり、人に罪をつくったりした人は、賽の河原で石積をしても、積めば崩れ、積めば崩れて、自分が泣かなければならない。わが身のためを思わず、世のためをはかり善業を重ねた人は仏になって、観音様が道案内をして三途の川の三教の橋を渡って、手を引かれて極楽へ連れていかれる。」と。

22. 興聖寺の襖絵(塚本) 町指定

(絵画)

塚本にある臨済宗円覚寺派興聖寺に弾丸の跡のある珍しい襖絵がある。それには次のような伝説がある。

天保年間の頃(1835年)である。塚本の農民たちは、農作物を荒し廻る一頭の大鹿に困りはてていた。そこで獵師に頼んでこの鹿を討った。確かな手ごたえ、ひづめの跡を追うと、興聖寺の境内に入り、なおも本堂へと続く。しかしひづめの跡はそこで消えている。住職を先頭に本堂をくまなく探したが鹿の姿は見当たらず、引き返そうとすると本堂の板戸の襖に書かれていた大鹿が生々しい血をしたたらせていた。一同は大いに驚いた。その翌月から大鹿はその姿を見せなくなった。誰いうともなく「興聖寺の襖の大鹿が抜け出して悪さをしていたのだな」と。この襖絵は美術品としても優れたものである。

また本堂左側に江戸時代隠れキリシタンが命がけで崇拜した「マリア観音」があどけない表情でその瞳を輝かしている。ともに町指定文化財である。



▲興聖寺の襖絵(塚本)

23. 養徳寺の仏画(平井)

(絵画)



▲養徳寺の仏画16羅漢(平井)

れ、同様な額絵が原の白隠禪師の寺と、京の銀閣寺にあると聞く。

十九世虎丘和尚の描いた達磨大師や多くの観音像も現在秘藏されており、8月24日の御施餓鬼の日に本堂一杯に飾られ、その光景は実に壮観である。

平井の福翁山養徳寺、寺歴は不明であるが、本尊は来光川、光ヶ淵に浮かんだとも、ハッ面から出土したものとも言われている11面観世音である。本堂正面の16羅漢は横1間半×高さ半間の板に描いた絵で竜、虎、獅子を配し巧みな構成と技法で美術的にも価値の高いものである。極彩色が年を経て殆ど色が剥落しているのが実におしい。右側の歌絵は小野小町を見るような人生の衰れを歌い上げた貴重な作品である。法伝寺の仏画と同一人の作と言わ

24. 双体道祖神 (田代)

(彫刻)



▲双体道祖神

●双体道祖神 (田代)

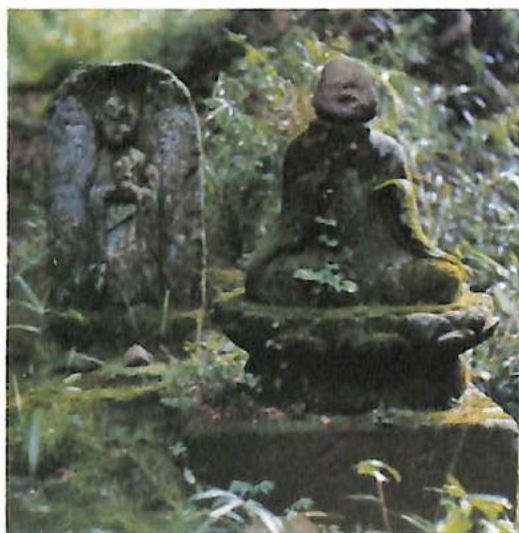
享保2年建設、伊豆には珍しい双体の道祖神で安山岩に刻まれている。当時痘瘡、コロリ病流行し難儀したので厄除けの神として祭られ、又女男神、豊作の神として明治、大正時代は子供の守り神として信仰された。

●日金山の道しるべ

日金山は火の神である火牟須比命の住んでいる所だと自然崇拝の中で考えられていた。

大土肥坂に大きな一の鳥居があり、その大土肥坂から下平井、赤坂、蟹の沢へさらに軽井沢を経て日金山へ登った。その日金山への道しるべが、御詠歌とともに残っている。

『日金山一の本戸が下平井、久保子童子大権現、薬師阿弥陀堂の前、さて赤坂を乗り越えて、法の山路の清水洞、辻観音のびんの沢ここに延命地藏尊(中略)いつしか峠の地藏尊見下す海や舟ヶ久保……』と御詠歌はその道すがらをよく歌っている。



▲日金山の道しるべ

25. 磨崖仏(畑毛)

(彫刻)

畑毛温泉の東方約1km山麓の正法院を経て更に約1kmの荒神道の林中、大岩に南面して彫られ、安政大地震（安政2年10月2日）で倒れたといわれるが、同岩の東側が昭和5年の伊豆大震災で割れ、大きく傾く処に太文字の梵字が鋭く彫られてある。その横に永徳2年（1381年）とあり、葦山町奈古谷毘沙門道中の磨崖仏と同一人の彫りらしいが、毘沙門道中のものより10年前に彫られている。共に北朝年号を使用しているのに別の興味が湧く。

百科辞典によると「地藏尊は鎌倉時代に貴族の間に広まり、内に菩薩の行を秘し比丘を現じ、左手に宝珠、右手に錫杖を持す」とあり、その最も崇高な姿を表している。

作者名は無いが、荒修行僧が初めにこの地を修行地としたものと推察される。

別岩に荒神が祭られ、荒神道の地名がある。

最近、風雨にさらされた古い五輪塔の祀舎が磨崖仏の前に建てられた。

●磨崖仏

凝灰岩・石灰岩・砂岩などの岩壁に彫刻された石仏像のことを磨崖仏（まがいぶつ）という。

薄肉彫と線彫との二種類があり、像容は阿弥陀・不動・地藏・大日薬師・観音・釈迦などが見られ、特に平安時代から室町時代にかけて各地に造顕されている。



▲磨崖仏(畑毛)

26. 駒形堂(軽井沢)

(彫刻)



▲駒形堂(軽井沢)

函南町軽井沢の曹洞宗泉竜寺に駒形堂がある。もと駒形堂は軽井沢の弦巻山の中腹にあったものが移され、今日に至っているが、これには次のような伝説がある。

承平6年(936年)平将門が関東を下る途中この地を通り過ぎようとした時、折悪く乗馬が病気になる、前に進むことができなくなった。勇猛をはせた将門も、馬の病気をなおすことはできず弱り切っていた。里人が駒形堂の観音様を祈念すれば必ず霊験あらたかなことを伝えた。そこで将門は一心に駒形観音に祈願した。すると霊験たちまち現われ、病はうそのようになおってしまった。これに感じ入った将門は馬頭観世音の像をつくり、安置したといわれている。それ以来、駒形堂の馬頭観世音は「馬の神」として近郷一带にその名が知れわたった。この馬頭観世音は後に泉竜寺の本尊仏となった。

またの伝説には、源頼朝がこの地に遊んだ時、名馬池月を得たので駒形堂を建立し、平

将門が安置した馬頭観音を本尊としたという。この堂のかたわらには、秩父重忠が矢の根をもって石に刻んだといわれる彫刻がある。

なお駒形堂の由来については次のような歌がある。

駒形堂の歌

昔々承平の 関東下向ありし時 乗りたる馬の病に 忽ち靈感平癒せり 弘法大師の御作の 安置ましまし此里の 御本尊とはなしたもう 源家の大将頼朝公 池を覚えて水はなし 「軽き水哉」味よしと 軽井沢と名づけ・可 高士の裾野に巻狩し 参拝せしが掛馬の 遠に見ゆる池の山 あな不思議と符見れば 七騎余りの馬立てり 池月とは名づけたり 弦巻山のふところに 彼の将門が安置せし 御本尊とはなしたもふ 彼の名馬にうたのれる 矢の根を以て大石に 秩父の守は重忠よ 弓弦巻きて折りける 昔も今も変わりなく 世にも霊験著し 御堂大願再建し 今また大正六年の 霊験まします観音の	二年平の将門が 弦巻山の嶺端にて 観音大士に祈願して 御恩報謝の其為に 守本尊の観音を 泉竜寺の内仏の 今より七百年前に 弦巻山にさしか・り 漸く清水を得たまへば 覚めてこのかた此の里を 而も建久四年には 将門安置の観音に 愛馬頼りに喝けり かなたにあたり馬の声 大蔵池のはとりにて これぞ世になき名馬にて かゝる名馬得し為に 駒形堂を建立し 馬頭観音大士をば かくて御堂の傍に 頼朝公の姿をば 刻みしるせし其人は かれは天下の泰平を 駒形権現これなるぞ 馬頭観音大士には 弘化四年の春の頃 明治維新に毀ちしを 花の三月再建し 功徳を仰ぎ奉る
---	---

27. 泉竜寺の毘沙門堂 (軽井沢)

(建造物)

毘沙門堂は軽井沢の泉竜寺の境内にある。もとは日金参道の入口、弦巻山の登山口にあった。伝説によれば、寿永3年(1184年)1月7日、一人の旅僧が日没のため、峠を越すに越されず、この地のとある民家に一夜の宿を頼んだ。その家の主人は快く一夜の宿を提供してくれた。

その夜は珍しく大雪となり、とてもこの大雪では峠を越えることはできない、もう1日滞在するよう言われた。しかしその旅僧は「鎌倉に急ぎの用があるから、この荷物をしばらく預ってくれ」と頼んで旅立った。

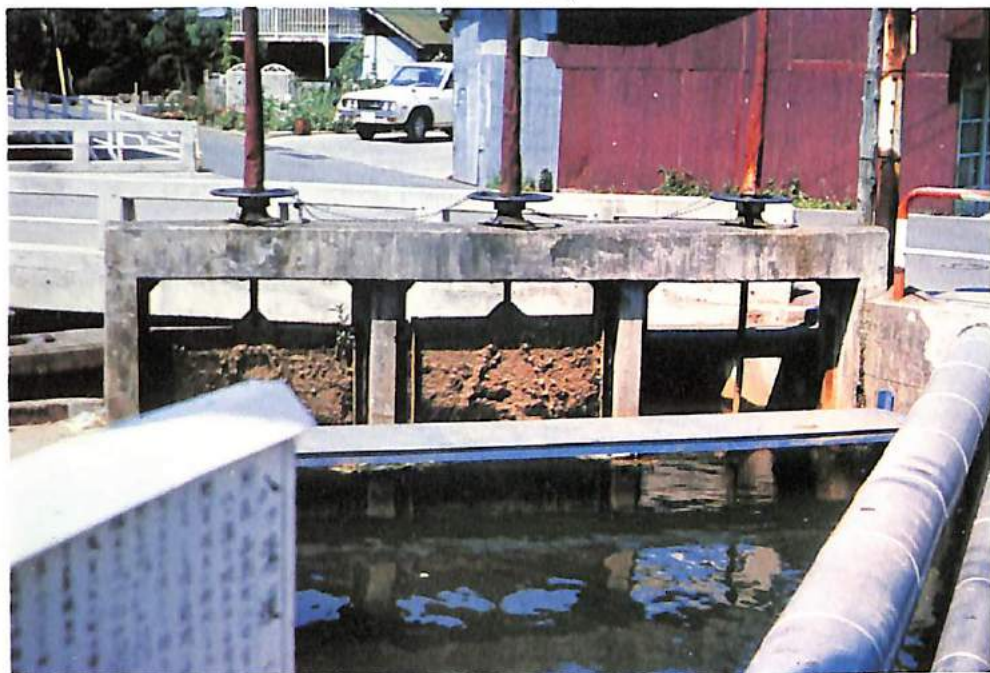
その後、軽井沢の定光寺という寺の僧の夢にその旅僧があらわれ、村の見晴しのよい所に祭ってくれとお告げがあり、急いでこの荷物を開いた所、毘沙門が現われ、これを祭ったという。真言宗であった定光寺はその後、廃寺となり泉竜寺に合併され、この毘沙門も同じく泉竜寺境内に移された。



▲毘沙門堂(軽井沢)

28. ハツ溝用水堰 (ハツ溝)

(工作物)



▲現在のハツ溝用水

ハツ溝用水は上沢で来光川用水を分水し、途中大場（三島市）耕地へ一条用水路をもって分水するが、通称ハツ溝（函南庁舎付近）まで導水、堰をもって仕切り、仁田・大土肥・塚本・間宮の4ヵ村田地を灌漑する重要な用水である。しかし、この用水路がいつ頃構築されたものであるかはまったく不明。上沢の分水口、上沢からハツ溝に至る導水路、ハツ溝の分水堰等を見てもわかるように人工的な用水路であり、しかも、この用水路が自然地形を利用して広範な・間宮・大土肥・塚本、さらに大場耕地をも灌漑するためのものであること、費用の点でも総延長でも大工事であったろうと思われることなどから考えて、近世初頭、「亥の満水」後に領主の力が強力に働いての代官見立新田が、新田開発か荒地復旧かいずれかの目的をもって開かれたものと想像できるし、その広範な新田の灌漑に資するものとして構築されたと推察される。

●ハツ溝用水争論

山の争論に対して水をめぐる争論は農業生産と直接関係あるだけに深刻なものであり、双方ともより多量の用水を得ようとして譲らないので大きな争論に発展しがちであった。



▲ハツ溝用水絵図

ハツ溝用水においても構築後分水方法について取りきめがなされたであろうが、延享5年（1748年）塚本村と間宮村との間で分水口の杭をめぐる争論が起き、地元では解決できず、ついに江戸表までもちこまれるほどにこじれてしまった。その結果としての分水方法をめぐる裁決は今日も慣例として活かされている。

29. 酪農頌徳碑 (丹那)



◀ 丹那渇水記念碑 (左)

井出彦四郎翁顕彰碑 (右)
川口秋助翁頌徳碑 (中央)

丹那渇水記念碑

丹那トンネル工事によって、丹那を中心とした周辺地域は深刻な水不足に陥った。そのため、この渇水問題を解決するために、近隣の村々15関係字とはかつて、渇水救済促進同盟会を組織し、(昭和7年)県や鉄道省に交渉しその解決を図った。その記念碑である。

酪農頌徳碑

● 川口秋助翁頌徳碑

「父子二代にわたり丹那酪農の基礎を確立した功績は偉大である」と碑文に記されている。

● 井出彦四郎翁顕彰碑

「明治45年川口牧場の牧夫となるや、丹那地域の乳牛の改良増殖に或は飼養管理の指導に努め、殊に病牛の看護については、日夜を分かたず寝食を忘れ精進し、丹那酪農のかげの功労者として村人の敬仰の的である」と碑文に記されている。



▲現在の酪農家屋

箱根峠の原生林(禁伐林)



▲禁伐林の遠景……………国道1号線箱根峠の南約5km。標高600~840m、面積253ha
伊豆の北部にあって、暖帯林と温帯林との接点をなす天然林。水源涵養及び保健保安林。

禁伐林

藩政時代より森林が保護され、現在は箱根禁伐林組合が管理している。昔からほとんど手が加えられていない自然林で、たきぎ一本でも持ち出し出来ない禁令がある。したがって、動植物の採集は禁止されている。ブナ、アカガシ、ヒメシヤラが主木で、巨木も多く、樹種も豊富である。昆虫はアカガシが多いためキリシマミドリシジミが発生する。

主な植物はブナ、アカガシ、ツクバネガシ、ヤドリギ、ランヨウアオイ、ハルトラノオ、サンショウバラ、ミヤマカタバミ、ミヤマシキミ、ヒメシヤラ、ハコネグミ、ヤマボウシ、ハコネダケなど360種以上分布している。

主な動物はニホンザル、シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、マムシ、アカゲラ、コルリ、ホオジロ、カシラダカ、キリシマミドリシジミ、クロシジミ、アサギマダラ、ルリタテハ、タカネトンボ、キハダショウジョウバエなど多数分布している。

30. 禁伐林のブナの大木(桑原) (天然記念物)

禁伐林のブナは純林として形成されていないが、他の樹木の中に散在している。箱根西麓斜面に生育しているが、他の生育地(富士山、天城山等)と比較すると樹高、枝張りが大きい。

禁伐林内の沢よりやや上方に多く分布し、ヒメシヤラとほぼ同じ高度分布を示す。最も大きなブナは禁伐林のほぼ中央にあり、皮目がよく発達している。

樹高24.0m、胸高周囲6.4m、根廻り12.0m、枝張り東方10.45m、西方16.0m、南方12.6m、北方17.0mで巨木にもかかわらず樹勢は良い。なお樹高2.6mで2本、3.8mで2本、6.3mで6本に主幹が枝分かれている。



▲禁伐林のブナの大木(桑原)

31. 禁伐林のアカガシの大木(桑原) (天然記念物)



▲禁伐林のアカガシの大木(桑原)

禁伐林のアカガシはブナよりやや下方より分布し、そのほとんどが西斜面に生育するが最大のは南斜面に生育している。昨年、一昨年と主幹の一部の枝が折れ、年々老化が進んでいる。巨木になると風の影響が最も大きく、枝が折れるとバランスがくずれ他の枝に波及し倒木に至る。約40本ある内、最も大きいのは、樹高20.0m、胸高周囲6.0m、根廻り13.3m、枝張り東方20.0m、西方9.5m、南方6.5m、北方17.3m、樹勢は極めて悪い。

なお、主幹にヒモ状に付着したオオカミノケタケ等の着生植物も見られる。

32. 天 池(間宮) (天然記念物)



▲天池(間宮)

函南村誌に「円形の池にして径四間、深さ計るべからず。1樹あり、樹下に弁財天を祭る」と記されている。

その「弁財天」は今もなお間宮老人会によって管理保存され祭られている。

昔は底無し沼で竜神がすんでいたという伝説がある。

直径7.2mほどの円形の池で、どんな日でも水は減らず間宮耕地を潤していた。

池の畔には1本のエノキがそびえ樹下に「弁財天」が祭られている。雨が降るように祈念した池なので、「雨乞いの池」ともいわれたという。また人々にとって、胃けいれんなどの時、「竜神さまを拝めばなおよむ」という信仰の池でもあった。

33. こだま石 (平井)

(天然記念物)

●こだま石

おうむ石、ひびき石の別名もある。平井字南谷下、新山に通ずる道近くにある大石でその大きさ約5m幅2mで緩やかな山の斜面に北面している。向い側の斜面から大声を出すと反響するので「こだま石」と名付けられたという。

このこだま石は田方郡誌や函南村誌にも載っている。

こだま石を詠める歌

「音にきく平井の里の こだま石
こたへて歌ふ節のくはしき」
(福羽美静)



▲こだま石

34. 空波の句碑 (仁田)



▲空波の句碑

俳人・雅仏堂空波は、富士川町に生まれ、文政、天保、弘化、嘉永、万延、文久、慶応、明治と約80年間、風雅の道に生きた俳人で、晩年仁田でその一生を終えた。

仁田大八郎氏とは親交があり、明治時代俳諧の大家として天下に知られた孤山堂凌頂によって、その辞世の句が書かれている。

辞世の句は「時雨野や煙りて灰の炭俵」。

35. 不動の滝（桑原）

（天然記念物）



▲ 不動の滝（桑原）

両南駅から約2km、船山の高源寺に通じる道路脇左側にある。水量は多くはないが年中絶えることがない。境内に不動尊を祭る堂があり、昔は遠近の善男善女が参籠、繁盛をきわめた。駅から近いので参詣するには好適の場所である。

● 観音滝（桑原）

桑原川をさかのぼって、馬坂から更に登ったところにある。高さ10m。観音堂も復元され、原生林中の森閑とした場所である。



▲ 観音滝（桑原）

36. 大場の久八の墓(間宮)



大場久八の墓

大場の久八は文化11年(1814年)10月2日伊豆国間宮村に生まれ、本名を森久治郎、久八と称した。江戸後期の侠客として「近世遊俠史」にその名を留めている。

全盛時代には上州系三親分の一人として子分、孫子分合せて3,600余人、駿河、伊豆、甲斐、武蔵、相模の5ヶ国を統率する大場一家の総長として東海道随一の大親分となった。嘉永6年品川沖に台場が築造されるや人足取締として幕府の事業に尽力し増上寺より五常の教えを用いた法号「信礼院義營智仁徳善居士」の諡号を受けた。安政地震には無利子の貸付金融「天野舎」を実施し被災者救済に当った。明治15年(1892年)12月4日病歿した。享年79歳。

37. 比企尼の墓(桑原)

現在、高源寺境内にあり、源頼朝の乳母であつた比企局(ひきのつぼね)の墓といわれている。

比企局は武蔵国比企郡少領掃部充某の妻として関東に住んでいたが、頼朝が伊豆に流されるや、少しでも近くにおいて世話をしやりたといと心がけたといわれている。

「増訂豆州志稿」の古墓の項に、「大竹村日影山に老松一株アリテ標ス。里俗地頭様ト呼ブ。伝言比企某の墓ナリト。按ズルニ比企遠宗ノ妻(世称比企尼)、源頼朝ヲ乳養ス、頼朝本州配流ノ日、夫妻亦從テ寓居セシナル可シ。是蓋其縁故ノ墓ナラム」と記されている。また、法国山光明院蓮華寺(庵寺)縁起に比企尼に関する記載がある。



▲比企尼の墓

38. 古民具収蔵庫（丹那）

（民俗文化財）



▲古民具収蔵庫

所在地 函南町丹那西方旧小学校敷地内

開館日 11月3日を中心とした函南町文化祭期間

主な収蔵品 江戸時代末から昭和20年代までの民具

収蔵品総数 約750点

収蔵品内容

農耕具資料 草取り機・足踏み脱穀機・麦もみ機等の木製農機類・はた織り機・俵編み機・養蚕等の織機類

運搬具資料 山ぞり・荷車・木製鞍等



▲運搬具

家具調度・

生活用具資料 いろり・タンス・各種食器
うす等。

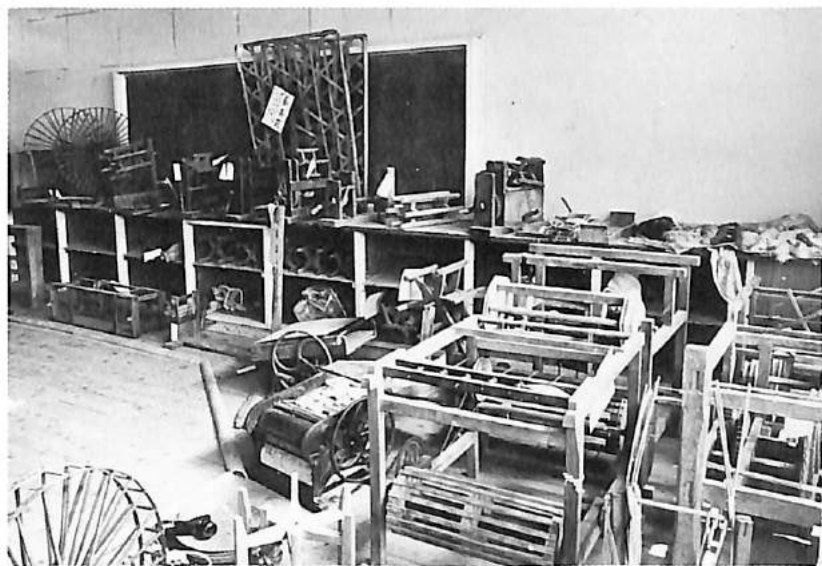
交通案内 軽井沢・田代行バス乗車、西方下車



▲農耕具

函南町は農を主体として生活してきた。地形も「山間部」「中間部」「平地部」の三様に大別され当然作業区も異なっている。従って配列も困難であったが、一応三区区分し、2階の部屋にそれぞれ配列されてある。

階段上廊下の机は大竹の田中萃一郎博士が少年時代使用したものであり、当時としては珍しい舶来の机である。



1号室は稲作作業具、麦作作業具に区分配列。この室の珍品は扇風器なき時代の「あおり打羽（柿渋塗）」脱穀機なき時代の「麦打竇木」と麦穂こなしの「くるりあを」沼田作業の「田下駄」脱穀機なき時代の「稲扱き万鋏」「手働唐臼」その他である。

後方の棚に山の作業具を陳列、その中に「白彫り道具」一式がある。昔は唐臼も精米機もなく粃を臼で、足踏みボタン搗きや手杵で夜業に米にし、精白にし、又麦の「ノギ」落しにもすべて臼は重要な農具であった。白彫りは山間部の人達の林業外の副業である。

・2号室は養蚕から繭糸とり、糸くり機、機織機を備え、戦前養蚕盛んの頃、世界第一の生糸国であった名残りを示している。

隣には運搬具を陳列し「山棧」は、材木や木炭の1t・2tをこの1台で一人で運搬したという。

3号室は須藤古文書による農家の住宅様式を示し、戦前は概ねこの様式が用いられた。家を建てるには二指（約30cm）の土盛をし、土台石を据え、床は三指（約45cm）以上の高さとし四間以上の田形に作るが良しと、10数項の方式と家庭規律が示されているが、その数項が復元され、表示されている。



▲蓑・笠類



▲旧名主の家

丹那地域では、川口家の長屋門、母屋が特に注目されている。この地域の豪族であり、名主までつとめたことから、母屋はちょうな削りの大黒柱、梁等は、安政の大地震、伊豆地震にも耐えてきたすばらしい四つ組みの木組を示し、江戸時代の建築様式が如実にうかがえる。

屋根の型式は寄せ棟、入り母屋である。



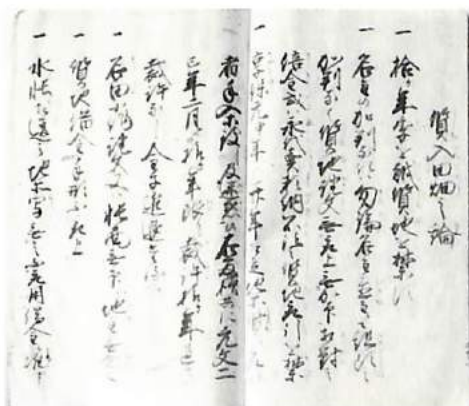
▲長屋門

40. 古文書

(古文書)



過去の時代の様相を知ろうとする場合、重要な役割を果たすのが過去の文書、すなわち古文書である。古文書には仏寺や神社、武家の家を中心にしたものが多いが、函南町には農民の生活にかかわる庶民文書が多い。



41. 田方の杜 (塚本)

(天然記念物)

この杜は俗に森山とよばれ塚本区の背後に孤立する海拔36mの丘陵で、面積は8,107㎡である。

古来、八雲抄にも記された杜で、歌人竹村茂雄の歌碑に

夕されば千町の稲葉うちなびき

田方の杜に秋風ぞふく

又、千家従三位の篆額に

狩野川の水にやうつすこの岡に

年経て立てる松こそしるし

この森山は古松森々緑苔繁茂して千古奇絶の趣がある。古くは土器等多数出土したという。



▲田方の杜 (塚本)

42. 十 国 峠

(天然記念物)



▲ 十国峠を望む

標高 774 m。西南町と熱海市との境界にある峠で、「日金山」ともいう。頂上からの展望の美しさは、林 諸鳥の碑文や高山樗牛の「日金登臨」の文、源実朝の歌「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」等に記録されている。

相模、武蔵、安房、上総、下総、駿河、遠江、信濃、甲斐、伊豆の十ヶ国が望めるところから十国峠といわれている。

43. 源実朝の歌碑

十国峠、日金山山頂にある歌碑である。

鎌倉三代将軍源実朝が(建久3年~承久元年) 21、2歳の頃、鎌倉から箱根権現の参詣を終え、伊豆山権現に向かう折詠まれたものである。

実朝の歌集「金槐和歌集」に「箱根の山をうち出て見れば波のよる小島あり。供のものにこのうらの名を知るやとたづねしかば、伊豆のうみとなむ申すと答えはべりしをききて」という詞書が添えられている。「箱根路をわがこえくれば いづのうみやおきの小島に波のよるみゆ」

碑は昭和7年7月建てられたものである。



▲ 源実朝の歌碑



▲向原にある円墳（柏谷）

＝ 編集後記 ＝

町内各区より、代表的な、すでに「文化財」として定着しているものを選び、当面「保存すべき文化財」と「活用すべき文化財」を中心にまとめ、美しい自然に包まれた「函南」が浮彫りになるよう編集しました。

函南町の皆さんが、この小冊子を通して、改めて町の文化財を認識され、文化財への関心を深め、その保存と活用を積極的に考えられることを切望します。

終わりに、写真を提供された前審議委員石川雅道氏、写真クラブ有志の皆さん、及び文化財保護審議委員の各氏に格別なご協力を得ましたことを付記します。（土屋）

編集 函南町文化財保護審議委員会

安倍修三郎	荒川 元暉
岩崎 晃	内田美代子
岡本 建二	梶尾 是彦
杉崎 好雄	土屋 弘光
森 義光	山内 昭二

（アイウエ順）

函南町の文化財

昭和58年3月15日発行

発行●函南町教育委員会

静岡県田方郡函南町仁田 9番地

TEL 〈05597〉 8-2250

8-3027

編集●函南町文化財保護審議委員会

印刷●日研印刷

